



だより

ハンサム金次郎シリーズ⑤
岡崎雪聲作もう一つの金次郎像
「菅笠草鞋肩掛読書像」



御机上の御物 ①御硯箱 鹿児島産の大竹製 ②御水入 銀製 蓋に菊型の摘み
③鳳凰蟠桃及松樹彫玉御花瓶 玉製 桃と松に鳳凰の長寿吉祥の意匠 ④御
呼鈴 真鍮製 ⑤梨地御紋散御苘箱 金蒔絵 ⑥菊御紋附御灰切 銀製 米前大統
領グラント將軍との御対面時に御苘箱と共に御使用 ⑦御マッチ入 菊御紋附
⑧御文鎮一對 表面に桜花管弦模様の精緻な彫刻

明治天皇御常用御机と御物「二宮金次郎像」

ー再現された伝説のイメージ・皇室と報徳のご縁回顧ー

令和元年10月26日、明治神宮の杜に隈研吾氏の設計による明治神宮ミュージアムが開館し、宝物殿に秘蔵されてきた御物が順次披露されることになりました。展示の一画に明治天皇表御座所の「御常用御机」(写真正面)とお側近くで御愛賞されたと伝えられる「御物銅製二宮金次郎像」(左端)のイメージ世界が再現されました。重厚な作りの「御常用御机」上の緋毛氈には、長期ご使用によると思われる色の班が残され、激動の近代国家形成期の先陣に立たれ、生涯質素儉約を貫かれた日常の一端が実感されます。御机奥の洋風の御椅子は北海道産クヌギ製、写真には見えませんが御座面は絹織物の花模様です。正面上に挿入した御真影はイタリア人画家キオソーネ筆、当時の絵葉書からの採録です。(御物写真のご提供、御物の説明は明治神宮のご教示によるものです)

皇室と報徳 折々のご縁回顧 近現代における報徳再評価の一面

『報徳記』の献上、叡覧

報徳の皇室とのご縁は、明治13年10月、二宮尊徳の生涯と業績を記した『報徳記』八巻が、福島県の中村藩主相馬充胤から宮内省へ献上され、天覧を得たことに始まります。翌年の10月3日、著者で二宮尊徳の高弟富田高慶と尊徳の孫尊親は、北海道・秋田・山形御巡幸中の明治天皇に、福島で拝謁しました。次いで明治16年12月23日、『報徳記』は宮内省版として刊行され、皇族をはじめ政官界の指導層に分賜されました。その経緯について宮内庁編『明治天皇紀 第五(12月23日の項)』には「～天皇報徳記を永覧あらせられ、尊徳の徳行を嘉し、その教を善とし、宮内省に命じてこの書を翻刻し、普くこれを頒ちて、その教を普及せんことを欲したまふ。～」と、報徳の要点説明も含め8行にわたって詳述されています。勤労、分度、推譲、至誠をもって生活の自立、困窮社会の再建を図り、その先に富国安民を希求する報徳の志向は、まだ不安定な国創りの渦中にあった明治天皇の御感に少なからず響くものがあったと思われます。



宮内省版『報徳記』
(報徳博物館展示)

『報徳記』は2年後の明治18年に農商務省と大日本農会からも刊行され、広く一般の国民にも読まれ、特に知識人の関心と共感を得るようになります。明治24年博文館刊行の幸田露伴著『二宮尊徳翁』の著述と、口絵の版画「負薪(柴)読書少年金次郎像」は、報徳・金次郎のイメージに大きな影響を残しました。その後作家、文化人による尊徳・金次郎に関わる著述が多く発表されます。また負薪読書金次郎像は日本画の画題としても度々取り上げられ、国定以前の教科書にも登場しました。

御物「銅製二宮金次郎御像」

明治37年(1904)国定教科書修身科目に二宮金次郎が採用され、翌年には「二宮尊徳翁(没)50年記念会」開催を契機に半官半民の報徳会(後の中央報徳会)が結成され、政官財界を中心とする報

徳の活用への動きが活発となりました。

このような流れの中で、明治43年(1910)10月、日本美術協会列品館で開催した博覧会に、彫金家岡崎雪聲(皇居前広場の楠木正成や上野公園の西郷隆盛などの大型銅像を鑄造)が、置物としての負柴読書と菅笠草鞋肩掛の二態の金次郎銅像(初の彫像)を出品しました。『報徳記』の逸話に基づく造形ですが、負柴読書姿が御物となりました。『明治天皇紀 第十二(十月十二日の項)』に「～是の日侍従日野西資博をして之を觀しめたまふ、爾後会期中更に侍臣を遣はしたまふこと兩度に及ぶ」とあります。天皇の強いご関心の程が伺えます。

昭和天皇御大典と学校金次郎像の普及

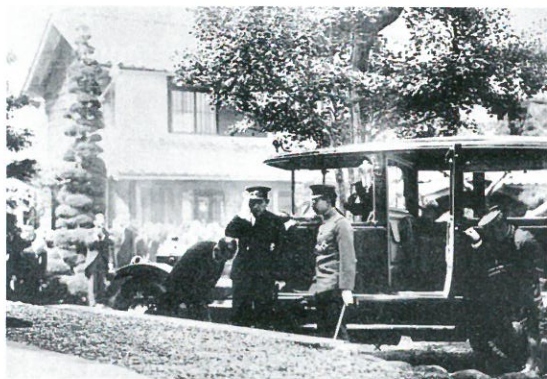
教科書で学童に馴染まれた金次郎は、巷でも引き札(商店のチラシ)や富山売薬の景品画に、負薪読書の金次郎像がお手本キャラクターとして多用されました。そのイメージが全国的に流布していく中で、大正時代末頃より小学校の校庭に金次郎像が登場します。その爆発的な流行の契機となったのは、昭和3年の昭和天皇の御大典でした。

官民あげて記念事業が企図される中、鑄造家や石屋衆による学校への負薪(柴)読書金次郎像の設置勧誘が盛んになりました。中でも神戸の中村直吉夫妻が出身地の神戸と明石の小学校のほか、尊徳生誕地小田原などに計84体の金次郎銅像を寄贈したことは、その流れを加速させました。製作を依頼された大阪の鑄造家三代目慶寺丹長はその手記で、御物「銅製二宮金次郎像」を参考にし、メートル法採用(大正10年)を記念して像高1メートルに設定したと述べています。

その一方で、前年から刊行開始となった『二宮尊徳全集』が宮内省のお買上げとなり、さらに編著者佐々井信太郎の新著『二宮尊徳研究』が献上されて天覧に及び、秩父宮、高松宮、三笠宮、澄宮各宮様が台覧されました。



御物「銅製二宮金次郎御像」(像高45cm)



「昭和天皇の御幸」大日本報徳社提供

大日本報徳社への行幸

御大典の2年後、昭和5年5月30日、静岡県御巡察中の天皇が大日本報徳社へ御臨幸されました。大講堂に設置された御座所で岡田良平社長が報徳社の来歴を概説、佐々井信太郎副社長が『二宮尊徳全集』を中心とする関連展示資料について説明にあたりました。尊徳の自筆文書の前で天皇は手を当てご覧になるなど、予定時間を超えての熱心なご視察であったようです。またこの年、慶寺丹長特製の置物負薪読書金次郎像が、中村直吉を通じて献上されています。

高松宮様のご視察、ご臨席

戦後の復興における報徳の役割が注目されていた時期、佐々井信太郎は高松宮邸に折々参上し、ご進講の任にもあたっていました。昭和26年、横浜の国会図書館大倉山分館で開催された『二宮尊徳全集』の資料展にも高松宮様がご来観、説明にあたった佐々井を激励されました。

また昭和51年(1976)に、二宮尊徳生誕120年祭が全国の報徳関係者を集めて小田原市で盛大に開催されましたが、この時にも高松宮様がご夫妻でご臨席され、二宮尊徳偉業展も興味深気にご覧になりました。報徳仕法に対する信頼は皇室に

長く引き
継がれて
いました。



「二宮尊徳偉業展」
ご視察の高松宮様
ご夫妻

ハンサム金次郎シリーズ⑤ 岡崎雪聲作「菅笠草鞋肩掛読書金次郎像」

明治43(1910)年の日本美術協会の美術展に出品された岡崎雪聲作のもう一つの金次郎像が、「菅笠草鞋肩掛読書金次郎像」です。幼時、家計の支えに草鞋を編み、また酒匂川の堤防修復の村普請では、半人前の非力を補うため、夜中に草鞋を編み作業場で村人たちに推譲(提供)しました。『報徳記』の伝える柴(薪)刈と草鞋の逸話に因む二熊の金次郎像が、この時に造形されました。

その後昭和10年前後から戦後にかけて、新たな彫刻家の関わりにより、草鞋を差し出して推譲の気持ちを積極的に表現した金次郎像が登場しました。昭和9年神奈川師範(現在横浜国立大学)附属鎌倉小学校で、金次郎の誕生日7月23日に合わせ、彫刻家中野五一製作の草鞋推譲姿の銅像の



岡崎雪聲作置物「菅笠草鞋肩掛読書像」

盛大な除幕式が行われました。現存しないのは残念ですが、同県愛川町の中津小学校に、同11年1月元旦に設置されたセメント製の草鞋推譲金次郎像は健在です。ほぼ同時期に静岡県掛川市横須賀小学校と島根県出雲市荘原小学校にも草鞋推譲型の銅像が建てられました。また戦後は昭和32年から、四代目慶寺丹長作の草鞋推譲像が神奈川県箱根町湯本小学校、小田原市の早川、報徳両小学校、南足柄市の南足柄小学校及び大井町の湘光中学校に新設され、全て現存しています。

右／箱根町湯本小学校の草鞋推譲銅像
左／愛川町中津小学校のセメント像



二宮尊徳玄孫・二宮精三氏からの新規寄託新資料紹介

昨年令和2年7月18日、二宮尊徳玄孫で小田原報徳二宮神社の責任役員の二宮精三氏が、美智子夫人、次女山田洋子様と共に同家伝来の大量の報徳資料を当博物館にご持参され、寄託されました。その総数は11月10日の追加寄託分も含めると283点になります。内容は二宮尊行夫人鉸子、尊親、徳、三郎、精三に至る系譜の動静と交流関係、収集品などを中心とした古文書類、版本、掛物類、短冊、色紙、神符、写真、特製時事式スクラップブック収納資料及びNew holder収納資料など、各分野にわたる興味深い貴重な資料、情報です。

唯一の近世資料として、文政6年(1823)難村最初の再建仕法地となった下野国(栃木県)桜町領の旗本宇津帆之助から、二宮金次郎に宛てた封筒付き自筆書状があります。事柄の詳細は不明ですが

「お話の趣、逐一承知」とあり、復興業務に必要な指示を受けたことに対する返信のようです。金次郎に一目置いた丁寧な言葉遣い、右筆並の達筆な墨跡と共に、絵刷りの封筒が目を引きます。破綻寸前の財政難にあってもなお、旗本身分の風雅な生活習慣が持続されていた様子が伺えます。

写真資料には三代目尊親の北海道豊頃開拓の記録とともに、四代目徳とその家族、同世代の写真が少なからず含まれています。報徳事業の関わりとしては、報徳信奉の事業家鈴木藤三郎主導で推進され、明治41年(1908)11月に完了した二宮家伝来一万件余の報徳文書の、3年がかりの謄写(筆写)事業成就(今市報徳文庫蔵「報徳全書」)の記念写真、「報徳全書謄写完成記念 相馬家執事及び書記等一同」があります。場所は旧相馬藩邸の事務所、背後には製本された全書の山が見えます。伝説的な謄写事業の現場の姿を伝えてくれる貴重な記録です。これらの資料によって、報徳近現代史のさらなる解明が期待されます。



二宮金次郎宛宇津帆之助書状封入の絵刷りの封筒



「報徳全書」謄写完成記念写真(右上挿入肖像写真は二宮尊親、前列右端尊親夫人鉸子、3人目尊行夫人鉸子)

業務報告

第2次コロナ緊急事態宣言解除後の動きと本館メンテナンスの予定

3月22日の第2次緊急事態宣言の解除を受けて、翌日より開館、通常の業務に戻り、4月からは「報徳ゼミ」「古文書に親しむ会」も再開しています。しかしコロナ感染状況は必ずしも好転したとはいえず、「中国を知ろう会」の開催は当面は見合わせます。

また、現況において博物館としての運営も厳しく、種々支障を来している時期ではありますが、築38年を経た建造物は老朽化に伴う問題が随所に生じてきました。雨水漏れや壁面タイルの剥落、電気関連施設のほか、館入口付近の路面補修や周囲の植栽整理など、危険除去や環境整備も急務となっています。このため理事会、評議員会の承認のもとに基本財産の一部を処分し、できるだけ早

い時期に対処する方向で準備を進めています。夏季には一時メンテナンス休館も余儀なくされますが、時期が決まりましたら、改めてネット等で日程をお知らせいたします。ご理解、ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

現在、開館日・開館時間は以下の通りです

- 開館日：毎週4日 土・日・月・火曜日(水・木・金曜日及び祭日代休日、年末年始夏休み、メンテナンス期間は休館となります)
- 開館時間：9時30分より16時まで
- *なお、団体の場合、前もって申し込みがあれば開館対応もいたします。

発行 公益財団法人報徳福祉社

報徳博物館

〒250-0013 小田原市南町1-5-72

電話0465(23)1151・振替00230-649044